

「大鏡」花山天皇の出家

寛和2年(986年)6月22日、19歳で宮中を出て、剃髪して仏門に入り退位した。突然の出家について、『栄花物語』『大鏡』などは寵愛した女御藤原し子が妊娠中に死亡したことを素因とするが、『大鏡』ではさらに、藤原兼家が、外孫の懷仁親王(一条天皇)を即位させるために陰謀を巡らしたことを伝えている。藏人として仕えていた兼家の三男道兼は、悲しみにくれる天皇と一緒に出家するとそそのかし、内裏から元慶寺(花山寺)に連れ出した。このとき邪魔が入らぬよう鴨川の堤から警護したのが兼家の命を受けた清和源氏の源満仲とその郎党たちである。安倍晴明の屋敷の前を通つたとき、中から「帝が退位なさるとの天変があつた。もうすでに：式神一人、内裏へ参れ」と言う声が聞こえ、目に見えないものが晴明の家の戸を開けて出てきて一行を目撃し「たつたいま当の天皇が家の前を通り過ぎていきました」と答えたとある。

元慶寺へ着き、天皇落飾すると、道兼は親の兼家に事情を説明してくると寺を抜け出してそのまま逃げてしまい、天皇は欺かれたことを知つた。内裏から行方不明になつた天皇を捜し回つた義懐と惟成は元慶寺で天皇を見つけ、そこでともども出家したと伝える。この事件は寛和の変とも称されている。

(<http://ja.wikipedia.org/wiki/花山天皇> より)

①次の帝、花山院の天皇と申し^{申しまし}た_{き。}

【丁】()→()

②冷泉院の第一の皇子なり。_{です}

③御母、贈皇后宮懷子と申す。

に

④ 永觀二年八月二十八日、位

年十七。 は
で した

御年十七 ⑤寛和二年丙戌

驚きあきれました誰

あさましく 候ひしことは、人

二二二

又之かこ花山寺に泊也)其一

ありの（）↓

— 1 —

御出家入道せ | な
させ | さつ
恰へりし | てしまつた
こそ、御年十九 | は

〔 〕 () → ()

（ ）→（ ）【 】

おは

世を架三治め
世を合三ながた
世を合三の
世を合三

→ () → ()

⑧ そののち、二十二年おはしましき。
後 ご存命でし た

【ポイント】
敬語が本動詞であれば、何の動詞の敬語なのか。
「〇〇」の【〇〇語】と書く
↑動詞の終止形

【ポイント】 二重敬語

しみじみと不憫に思う
⑨あはれる

〔⑨ あはれなることは、下りおはしまし 〔→〕 みじみと不憫に思う 〔→〕 退位 なさつ〕

夜は、

有明の月のかともに、いみじく明かりければ、
あらわではつきりしてゐるなあどうすればよいのか。
⑩「顕証にこそありけれ。いかがすべからむ。」と仰せられけるを、
おっしゃつた帝

春宮の御方にわたし奉り給ひければ、
お渡し申し上げなさつてしまつた
（→）（→）（→）（→）

花山院天皇のこの時の心情は？

【ポイント】 指示語の指すところ

【ポイント】 二方向への敬意

【ポイント】



そら泣き なさつ
【】 (→) 給ひ た
けれ は。とはね

粟田殿の内心を書きなさい

⑯ 栗田殿の、「いかに、かくは おぼしめし ならせ おはしまし ぬるぞ。」
⑰ ただ今過ぎば、おのづから さはりも 出でまうで來なむ。」と、
の機会を お思いに なつ てしまふのですかよ。
逃したならば 自然と 支障 きつと 参りま しょう

歩み出で歩き出しお
させなさるの
給ふうちだ
ほどにけり。
と仰せおっしゃつ
られてなあ

月の顔にむら雲の
面影が
かかりて、少し暗がりゆきければ、
かかる
かかつ
暗くなつていつた
さやけき影を、まばゆくおぼしめし
【】()→()
明るい月の光
気がひけるとお思いになつたうち
つるほどに、

「我私をば、はかるなりけり。」と申しあげなさつたければ、のでおつしゃつ泣かせになつ給ひけれ。

あはれに悲しきことなりな。ね

平生 ごろ、よく御弟子にて として お仕えしま
〔 〕 〔 〕 候は しよう 約束し
の 一 一 む と 契りて、

【】	す	かし	騙し
【】	申	し	申し上げ
（→）	（	）	なさつ
（→）	（	）	たよくな
（→）	（	）	恐ろしいこと
（→）	（	）	が恐ろしさよ。

花山院天皇の涙の理由（内心）を「つぶやき」で表現しなさい。



花山院天皇の涙の理由（内心）を「ふやき」で表現しなさい。